助動詞キの活用形態について

大秦一浩

一

古典文法に関する素朴な（或いは浅慮な）疑問について検討したい。その疑問というのは、いわゆる過去の助動詞キの活用形態に対してであり、素朴な、と言うのは、現行の辞書でも文法書でも学校教科書でも、この助動詞が既に疑いようもないほどに整った助動詞活用表の中に定置されている、その事実に対して揚言しようとするからである。もはや文法上の常識となっている助動詞キの活用表を次に挙げておく。

未然	連用	終止	連体	已然	命令
せ	○	き	し	しか	○

明らかなように、助動詞キは、カ行系とサ行系の形態が混在して成り立っているわけだが、このような混在が一つの活用表として示されていることには、一見して奇異を覚えざるを得ないのではないかと思われる。

というのも、活用の原則から言えば、このような混在が必ずしも当然ではないように見えるからである。そもそ

も活用現象とは、その典型を示す動詞の活用を念頭に置くと、大きく三種類の捉え方ができるものである。[注1] 第一は、四段活用、ラ行変格活用に認められるもので、母音の交代による形式である。例えば次の通り。

語幹	未然	連用	終止	連体	已然	命令	
読む	よ	ま	み	む	め	め	（四段活用）
あり	あ	ら	り	る	れ	れ	（ラ行変格活用）

活用語尾の子音は同行で母音のみ変化する活用形態である。第二は、上一段活用、下一段活用に認められるもので、接辞の付加による形式である。例えば次の通り。

語幹	未然	連用	終止	連体	已然	命令	
見る	（み）	み	み	みる	みれ	みよ	（上一段活用）
蹴る	（け）	け	ける	ける	けれ	けよ	（下一段活用）

語幹部分（「み」や「け」）に変化はなく一貫しており、これに「る」「れ」「よ」という接辞が付加されてできる活用形態である。第三は、上二段活用、下二段活用、カ行変格活用、サ行変格活用、ナ行変格活用に認められるもので、第一の母音交代形式と第二の接辞付加形式との混合による形式である。例えば次の通り。

語幹	未然	連用	終止	連体	已然	命令	
落つ	お	ち	ち	つ	つる	つれ	ちよ（上二段活用）
流る	なが	れ	れ	る	るる	るれ	れよ（下二段活用）
来	○	こ	き	く	くる	くれ	こ（カ行変格活用）
為	○	せ	し	す	する	すれ	せよ（サ行変格活用）

往ぬ　い　な　に　ぬ　ぬる　ぬれ　ね　（ナ行変格活用）

母音の交代が見られつつ同行・同子音が一貫し、連体形、已然形、また命令形において、終止形の形態に接辞が付加されてできる活用形態である。動詞活用は以上の三種類の原理に簡潔にまとめられるのだった。

煩瑣にもこのような基本的な事項を、今更ながら挙例して記すのは、これらのどれをとっても、活用形に一貫して見られる形態が同一行であり、同一子音である、ということを決して違えないという事実を確認するためである。すなわち、前に見た助動詞キの「活用」をまとめた表の中に、カ行系とサ行系の形態が混在するなどというのは、動詞活用の事実を前にすると、まず奇妙な、あり得ないことに思われるはずなのである。

もちろん活用するのは動詞だけではない。活用する語には形容詞も形容動詞もある。このうち、形容動詞については、成立の上で存在詞アリの明らかな影響下にあって、その活用がラ行変格活用と同様であることから、先掲の動詞活用に含まれるものと見なせるため脇に置くとして、形容詞には触れておく必要がある。形容詞の活用は、その語尾に、異なる行、異なる子音が混在するという形式になっているからである。

語幹　未然　連用　終止　連体　已然　命令

高し　たか（く）　く　し　き　けれ　○　（ク活用）

このような形容詞活用に認められる、カ行系とサ行系の形態が混在するという事実をもって、助動詞キの活用形態のカ行・サ行の混在が直ちに認められるかと言うと、おそらく問題はそう単純なことではないように思われる。というのも、形容詞の活用と言われているものは、もともと動詞の活用のように体系的整合性をもって生成していないからなのである。そもそも、一つの単語としての形容詞は、その成立以前の段階として、或いは原理上の基盤として、形状言（或いは情態言など）と呼ばれる単位[注2]が考えられている。通常この単位は、形容詞の語幹と呼ばれ

る部分を指すものであって、複合語内部においては連用修飾や連体修飾の用法を担うものと捉えられるものである。そして、例えば、複合語内部の連用修飾として「高知る（たかしる）」（万葉三八など）、連体修飾として「高山（たかやま）」（万葉八六など）など、多様な接続用法の見出される形状言が、その用法を明確化する中で、連用接辞ク、連体接辞キ、または終止接辞シを分出させてゆき、連用形「高き」、連体形「高く」、または終止形「高し」という形式に至るという生成過程が想定されるとき、それは各活用形の個別的な接続用法の成立が認められているということである。結果的に、活用表において各活用形の用法を担う形態は具備されているものの、それは個別具体的に生成された接続のための形式を、同一形状言の共通性という観点から、一つの表の中に当て嵌めた姿としてあり得ているわけである。これは、動詞活用形態、殊にその母音交代という原則における各活用形式の内発的な生成や自然な体系性から見て相当異質なものであって、動詞活用を基本にすれば特殊なものと言わざるを得ないのである。すなわち、形容詞の活用において、本来それぞれの機能を果たすために生成したカ行系形態とサ行系形態の混在は、形容詞という単語が形状言の基盤上にあるという認識によって一つに成り立っているわけである。

時に、助動詞の活用表と言われる一覧を概観すると、活用の型という項目が見受けられる。これは、それぞれの助動詞が、他の活用語のどの型に類するものかを示したものである。大きく分類すれば三種類で、動詞型（形容動詞型を含めておく）、形容詞型、特殊型である。動詞型、形容詞型は、名称の通り、それぞれ動詞、形容詞と同様の活用形態を示しているものであり、特殊型は、どちらにも属さない形態を示すものである。特殊型には、ズ、ジ、マシ、キ、ラシが該当し、もとよりカ行系とサ行系の形態が混在するキが特殊であることは認められているのだが、同じ特殊型であっても、キ以外については、ジ、ラシは形態不変化という特殊性であって異行の混在はなく、ズはザ行系とナ行系の形態が混在するかに見えるが、これはナ行系形態からザ行系形態が派生したとされる観点から一

往解消され、マシは難儀だが、マシという基本形態の上に、未然形マセは母音交代的に、已然形マシカは接辞付加的に、一往把握しておくことが可能である。つまり、活用形の中に明瞭に異行形態が混在する助動詞キは、特殊型の中でも特殊な存在なのである。助動詞活用表の全体を見ると、確かにカ行系、サ行系という異行の混在はまま見受けられるところだが、それらは助動詞キを除いてすべて形容詞型であり、形容詞型は形状言を基盤に成り立つ形容詞を根拠にもっていたこと、先述の通りであって、助動詞キにおけるカ行系、サ行系の異行混在とは事情が異なる。それゆえ、異行の混在する活用形態である助動詞キは、助動詞全般の活用形態から見ても、とりわけ特殊であり訝しいのであった。

そして、助動詞キの活用形態の中でも、特に不審なのは、サ行系形態の活用形の中に迷い込んだかのように孤立するカ行系形態、終止形のキである。というのも、終止形の形態として、助動詞キは他の助動詞と異なる姿勢を示しているからである。

ここで今一度、助動詞活用表の全体を見渡してみる。すべての助動詞が、活用形態として、動詞型、形容詞型、特殊型、の三種類に区分されること先述の通りである。そうすると、動詞型の助動詞終止形は、動詞に準じる形で、末尾がウ列音、または、リ（存在詞アリに基づくもの）となる。形容詞型の助動詞終止形は、形容詞に準じる形で、末尾がシとなる。特殊型の助動詞ズ、ジ、マシ、キ、ラシについては、前に見たように型としての特殊性を示しながらも、終止形形態としては、ズがウ列音末尾、ジ、マシ、ラシがシ末尾となっており、実は動詞型、形容詞型になぞらえた形態として認め得るものである。つまり、助動詞キ以外のすべての助動詞終止形が、動詞型、形容詞型のいずれかに有縁であるものと捉えられ、助動詞キのみが類属先を見出せないままに残されてしまうのである。

助動詞キの活用形態、殊に終止形キは、やはり奇妙な、不思議な存在ではないかと思われるのである。

二

見てきたような、異質に思われる活用形態の助動詞キは、現行の定着を見るまでにどのように捉えられていたのか。本稿は、助動詞キの活用形態に関する学史の追究を目的とするわけではないが、現行国文法に大きな影響を及ぼす代表的な二つの先行説についてはその見解を確認しておきたい。まず、山田（一九三六）の記述を引く。

「き」は回想する意をあらはすものにして特別の活用形を有す。その活用形次の如し。

	終止形	連体形	已然形
（行き）	き	し	しか

その用例次の如し。

うれしかりし事どもなり。

貧窮甚だしかりしかば上方に往きて身を立てむと思ひき。

この「き」がその活用形の上に音質の一致せぬものを用ゐてあることは注目すべき点なるが、今それらの理由を知るに由なけれども、恐らくは「き」と「し」「しか」とは源とする系統の異なるものにあらざるか。而して「き」は回想をあらはすもの、本体にして「し」「しか」は本別種のものたりしが、後に二者合一せしものにあらざるか。かくてそれにつきて考ふべきことは後に句論に行きて説く如く、

いかで見てしがな。

甲斐がねをさやにも見しが。

などの如く希望をいふ場合にこの「し」を用ゐる点なり。この場合の「し」には回想の意も過去の意もなくして、たゞこの「し」にのみ存する特別のものと認めらるゝが、こゝにこの「し」が恐らくは確認を示すものとして用ゐられし事古代にありしことを示すものならむと思はるゝなり。

この「き」の活用形は三段活用に限り所属に特別の現象あり。即ち加行三段にはその「し」「しか」の二活用のみつき、しかも、未然形にも連用形にもつくなり。その未然形につけるもの、例

くらべこし振分がみも肩すぎぬ。（伊勢語）

人ふるす里を厭ひてこしかども奈良の都もうき名なりけり。（古今）

その連用形につけるもの、例

きしかた行くすゑ思ひつゞけられて（源、総角）

（「きしか」の例の古きものは例を見ねど普通には用ゐらる。）

次にサ行三段活用に対しても亦未然、連用の二活用形につく。但、こゝにてはカ行三段に於ける場合と現象を異にし、連体形の「し」已然形の「しか」が未然形につき、

今まで無礼せしは過なり。

やがてさぶらはむとせしかど（宇都保、蔵開中）

終止形の「き」のみ連用形につけり。

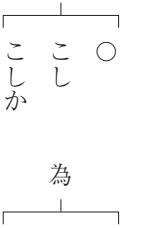
鬼のやうなるもの出で来て殺さむとしき。（竹取物語）

助動詞キに関するまとまった記述をすべて引いたところだが、ここに助動詞キの意味・用法上の特殊性が明確に

述べられている。後半部分は、助動詞キの、その上接語との特殊な接続のしかたが説かれており本稿の目的とは別しているけれども、前半部分に注目すべき指摘があるのであり、それは「この「き」がその活用形の上に音質の一致せぬものを用ゐてあることは注目すべき点なるが」とあることであり、活用形態上の異質さが意識されていることを知る。そして、理由は不明ながらも、「恐らくは「き」と「し」「しか」とは源とする系統の異なるものにあらざるか」と述べて、ためらいを見せつつも、カ行系形態とサ行系形態とが本来は「別種のもの」であることを指摘し、時の推移に従って「二者合一」したのではないかと説かれるのである。助動詞キの活用形態への不審については自然な把握であると思われるのであるが、ここで釈然としないのは、本来カ行系とサ行系が別種であると認められているにもかかわらず、後に合一したものだと当然のように述べられている点である。つまり、助動詞キの活用形態におけるカ行系とサ行系との混在は、何ら説明を要することもなく当たり前のことであると捉えられているように見受けられるのである。本来別種のものであって「活用形の上に音質の一致せぬもの」を、当然の如く一つであると認める、そのわけは明らかになっていないと言わざるを得ない。次に、橋本（一九六九）の記述を引く。

「き」は奈良朝以前から多く用ゐられてゐる。連用形につき、活用は、終止、連体、已然の三つが普通である。但、カ変、サ変につくには異例がある。

き（甲類）　し　しか



上に完了の助動詞を受ける。《「にき」「てき」「りき」など》

ク形は「しく」となる。

思へりしくし面かげにみゆ （萬四、七五四）

来しくもしるく （萬八、一五七七）

その外に、「せ」といふ将然形があった。いつも「ば」につゞく。

沖つ風いたく吹きせば （萬十五、三六一六）

可受賜物（ウケタマフベキモノ） 奈利世波（ナリセバ） 祖父仕奉（オホヂツカヘマツリ） 天麻自（テマシ） （宣命、廿六詔）

ひとにありせば （記、中）

十月（カミナツキ）雨間毛不置零爾西者（フリニセバ）誰が里の間に宿かからまし （萬十二、三二一四）

これは、「する」といふ語の将然形とも見られるが、「ふりにせば」のやうに、助動詞「ぬ」からつゞくから、これと同じものとする事が出来ないのである。

「き」は過去の事を述べるのであるが、この「せ」は必しも、過去の事についていふのではない。むしろ、之を受けて文を結ぶのは、「まし」といふ助動詞であつて、これは事実に反した事を仮定する場合に用ゐられる。かやうに意味の上から「き、し、しか」とちがつた点がある故、之を同じ語の活用とするのも、どうかとおも

はれる。しかし、また、形から云へば、「し」「しか」の「し」に近く、意味も、全く事実に反した事であるから、過去の形を用ゐたと考へられないでもない。しばらく、通説にしたがつておく。

（※平安朝の例、音便形、鎌倉期の例についての所説省略、稿者）

「き」の語源については、「き」は「来」の義であるとする説が有力である。仮名が同じであるから、その点からは差支えない。「来き」といはないのも、或はその語源を示すものかも知れない。「し」は、「き」とは別の語源のものらしい。「為」から出たといふ説もある。或は、指示詞の「し」と関係があるものかとも考へられる。「しか」の「か」に至つては一層不明であるが、「然る」意味の「しか」との関係も考へられる。しかし、語源はなほ考ふべきである。

前半部分から助動詞キの活用形態を述べ、将然形（未然形）として「せ」を認める指摘があり、これは現行国文法において認められている穏当な立場である。ここで注目すべきは、後半部分の「「き」の語源」に言及するところであり、助動詞キが、動詞「来」の意義である、との立場が取り上げられているということである。そして、委細不明であるとの慎重さを示しながら、「「し」は、「き」とは別の語源のものらしい」と述べられるのである。

助動詞キの活用形態におけるカ行系とサ行系は、語源を異にすることが述べられ、特にカ行系のキが動詞「来」由来である可能性をも述べられているのだが、前述の通り、それにもかかわらず、当然のこととして、カ行系サ行系の混在が助動詞キの活用形態であるとして認められているのである。

山田説でも橋本説でも、助動詞キにおける異質な活用形態について指摘しつつも、そのカ行系サ行系の混在の不審についてはひとまず置いておかれることとなっていた。すなわち、形態上の異質さが認められながらも、そのよ

うな有様は既定のことに属していたということであり、このことは、学史上既に成立していた認識の、自明な継承が窺われることによって了解されるのではないかと考えられる。

そこで、山田説、橋本説以前に成立した、助動詞キの活用形態に係る学説を見ておきたい。それは、現行国文法にまで至る伝統的な立場の代表的な存在、国文法学史上大きな成果をあげた鈴屋門流の始祖である、本居宣長（享保十五（一七三〇）―享和元（一八〇一））の所説である。日野（二〇〇八）の指摘する通り、宣長が、助動詞キについて卓見を有したことは、衆目一致して認めるところであろう。宣長の所説を見るべく『てにをは紐鏡』[注3]および『詞の玉緒』[注4]を取り上げる。

古典文における係り結び現象について、係助詞類に呼応する文末辞の形態を一覧図にした『紐鏡』を見れば、本居宣長によって助動詞キの活用形態がどのように観察され定位されたのかを窺い知ることができる。概略を抜粋して示せば次のようになる（図中の具体例、注記はここに割愛して後に触れる）。

	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段	……
は・も・徒	し	し	き	にき	てき	……
ぞ・の・や・何	き	しき	し	にし	てし	……
こそ	けれ	しけれ	しか	○	○	……

係助詞類は三種類が右から左へ並べて挙げられており、順に①「は・も・徒（タヾ）」、②「ぞ・の・や・何」、③「こそ」であり、これらが文中に現れると文末がどのような形態となるかが、その下に記されることになる。なお、「徒（タヾ）」と

は特定の助詞類が存在しないこと、「何」とは疑問詞類を指す。そして、文末形態は、同類ごと各段に整然とまとめられ、多くの具体例が挙げられている。第一段は、①「し」べし、なし等、②「き」べき、なき等、③「けれ」べけれ、なけれ等となっており、つまりク活用形容詞語尾および同型の助動詞について、①終止形、②連体形、③已然形が挙げられている。第二段は、①「し」うれし、たのし等、②「しき」うれしき、たのしき等、③「しけれ」うれしけれ、たのしけれ等となっており、つまりシク活用形容詞語尾の三つの活用形が挙げられている。第三段は、①「き」ありき、なかりき等、②「し」ありし、なかりし等、③「しか」ありしか、なかりしか等となっており、つまり助動詞キの三つの活用形が挙げられている。第四段は、①「にき」なりにき、たえにき等、②「にし」なりにし、たえにし等、③ナシ（空白部）となっており、つまり助動詞キが別の助動詞に連続した例（助動詞ヌ＋助動詞キ）が挙げられている。第五段は、①「てき」いひてき、思ひてき等、②「てし」いひてし、思ひてし等、③ナシ（空白部）となっており、これも助動詞キが別の助動詞に連続した例（助動詞ツ＋助動詞キ）が挙げられている。

これ以下の段にも多くの例が記載されてゆくが、以上の五段分について、欄外右に「此五段のしときとの留りをよくわきまふべし。たがひにまがひやすきてにをは也。古への歌はすべて此格のたがへる事はなきを近代の歌には此格にかなはぬが多きはみなあやまり也。」との注記があり、欄外左には「此けれしけれは常のけれとは別にてけりけると転ずる事なし。」「〇此五段のうち上二段は現在、下三段は過去にてしときと入かはる事てにをはの肝要にて言語の自然の妙なり。」との注記がある。

注記の内容であるが、まず欄外右における「此五段のしときとの留り」とは、第一段・第二段の「し（形容詞語尾）」と、第三段およびその派生形式である第四段・第五段の「き（助動詞）」の、係り結び文末形態を指しており、両者が恰も終止形と連体形を入れかえてあるかのような紛らわしい形態をもつことに注意を促すものである。次に

欄外左の注記であるが、「此けれしけれ」とはク活用・シク活用の形容詞已然形語尾を指しており、助動詞ケリとは別物であることを指摘しており、また「此五段のうち上二段は現在、下三段は過去」とあるのは、第一段・第二段の「し（形容詞）」が「現在」の意味、第三段およびその派生形式である第四段・第五段の「き（助動詞）」が「過去」の意味であることを指摘するものである。そして、互いに入れかえたかのような紛らわしい形態をもつ両者が、現在と過去を意義分担することを「言語の自然の妙」と評する。

この『紐鏡』における「し」「き」の活用形態と意味の把握については、『詞の玉緒』に詳しい記述がある。『紐鏡』における注記と重複する内容もあるが、『詞瓊綸六之巻』における「むすび辞」の項、「し き ひも鏡第一段より第五段まで」を引き、私訳を施す（補足を丸括弧内に付す）。

○おほよそしときと相転る言に三つのかはり有。一には紐鏡第一段。右行し。中行き。【左行はけれ也。】これ也。二には第二段。右行し。中行しき。【左行はしけれ也。】これなり。三には第三段。右行き。中行し。【左行はしか也。】これ也。第四段第五段は第三段に同じ。さて此三つの中に。上二段【第一第二】のしは。いはゆる現在のし。下三段【第三第四第五】のしは。いはゆる過去のしなり。【後世の名目に。しにのみ現在過去の称有て。きには此称あることをきかず。そも〳〵此五段ともに。しときとは。たゞその言の切るゝと。下へつゞく所とのけぢめにて。上のてにをはにしたがひて。かはるのみにこそあれ。意は全く同じくて。きにもしのごとく。現在過去の意はあれば。上二段のきは。現在のきといふべく。下三段のきは。過去のきといふべきにこそ。】かくて上二段は。は も 徒 のかゝりの時しと結び。ぞ の や 何 のかゝりのとききと結ぶを。下

三段は。うちかへして　は‖　も‖　徒‖　のかゝりの時きと結び。ぞ‖　の‖　や‖　何‖　のかゝりの時しと結ぶ。此事初学のともがらはまどひやすし。紐鏡と此一の巻の三転証歌とをよく考へ合せてわきまふべし。

〈私訳〉○おおよそシとキと互いに変わる言葉には三つの変わり方がある。一には『紐鏡』第一段における、右の行（終止形）はシ、中の行（連体形）はキ、【左の行（已然形）はケレである】、これである（ク活用形容詞語尾）。二には（『紐鏡』）第二段における、右の行（終止形）はシ、中の行（連体形）はシキ、【左の行（已然形）はシケレである】、これである（シク活用形容詞語尾）。三には（『紐鏡』）第三段における、右の行（終止形）はキ、中の行（連体形）はシ、【左の行（已然形）はシカである】、これである（助動詞キ）。（『紐鏡』）第四段（助動詞ヌ＋キ）・第五段（助動詞ツ＋キ）は第三段に同じ（要は助動詞キの活用だから）。そして、この三つの中で、上の二段【第一段・第二段】のシ（形容詞語尾）は、いわゆる現在のシであり、下の三段【第三段・第四段・第五段】のシ（助動詞）は、いわゆる過去のシである。【後世の名目に、シにのみ現在・過去の称があって、キにはこの称があることを聞かない。そもそも、この五段ともに、シとキとは、ただその言葉の言い切るところ（終止形）と下へ続くところ（連体形）との区別であって、上のてにをは（係助詞）に従って、変わるだけである。意味は全く同じであって、キにもシのように、現在・過去の意味（形容詞連体形語尾のキ・助動詞終止形のキ）はあるので、上の二段（形容詞語尾）のキは現在のキというべきであり、下の三段（助動詞）のキは過去のキというべきである】。こうして、上の二段（形容詞）は、「は・も・徒」が係るときはシと結び、「ぞ・の・や・何」が係るときはキと結ぶのだが、下の三段（助動詞）は、（形容詞の形とは）ひっくりかえして、「は・も・徒」が係るときはキと結び、「ぞ・の・や・何」が係るときはシと結ぶ。このこと、初学者は惑いやすい。『紐鏡』とこの一巻の「三転証歌」（三つの活用形の証拠となる歌例集）とを

よく考えあわせてわきまえるべきである。

係り結びの法則、また係り結びに関わって形容詞と助動詞キの活用形態を区別すること、いづれも実証的に的確な指摘であること周知の事実である。だが、係り結びという事実を明確に説く中に、品詞上の観点からは首肯しがたく看過し得ない問題が含まれていることもまた明瞭である。すなわち宣長は、形容詞語尾と助動詞キの活用形態に截然とした区別を認めながらも、両者を同類の接辞として扱っており、異なる品詞であるという事実には注意を払っていないのである。宣長が、形容詞終止形語尾のシを「いはゆる現在のし」と言い、助動詞キの連体形シを「いはゆる過去のし」と言って、両者を品詞上分別しない論述中に「いはゆる」を冠することに、それが当時の一般的認識の所以であることも明らかなのであるが、これをふまえた上で、形容詞連体形語尾のキを「現在のき」、助動詞終止形のキを「過去のき」と称するよう唱えるとあっては、形容詞語尾と助動詞キについて、宣長もまた両者を同列視し同類の接辞としての認識を示すこと言うを俟たないであろう。このことは、『紐鏡』第一段の具体例において、挙げられた多くのク活用形容詞の中に、助動詞ベシが混在することにも明らかである。また、形容詞活用形態のシとキとが、「切るゝ」と「つゞく」の「けぢめ」、すなわち終止形と連体形の区別であるとの指摘は至当である。だが、これをふまえた上で、それら形容詞語尾シとキとが、助動詞キの終止形キと連体形シと、互いにひっくり返した形になっている（『紐鏡』では「入かはる」と言い、現在と過去の意味の言葉がこのような形態上の関係にあることを「自然の妙」と述べていた）との指摘は、両者を品詞上分別しないという認識のみにとどまらず、形容詞の活用に認められるカ行系形態とサ行系形態の混在が、助動詞キにおいても同様に無理なく受容されるものであることを自明化し、それがもはや当然の認識であるかの如くに展開するところとなろう。

もとより形容詞の活用語尾とそっくりの活用形態をもつ助動詞は確かに存在し、それは形容詞型と称されていた。当然にカ行系サ行系が混在する形態であった。しかし、それは形容詞の活用とそっくりである（すなわち、形容詞語尾の影響・関連がある、さらに勇み足ながら言えば形容詞語尾に淵源を有する）形式であるために、形容詞という品詞の後ろ盾を得てあり得るのであった。単にカ行系サ行系の混在が認められたというわけではないのである。

現行の国文法において、形容詞語尾を指して「現在のシ」「現在のキ」などと呼ぶことはない。形容詞語尾と対応させることによって助動詞キを「過去のシ」「過去のキ」と言うこともなければ、形容詞語尾と助動詞を全く同列に扱うこともない。ところが、今日では顧みられなくなった捉え方のある一方で、助動詞キを「過去」と見ること、助動詞キの活用形態にカ行系サ行系が混在する捉え方は今も健在である。しかし、形容詞語尾と同列視する中で、いわばその保証の上に説かれてきた助動詞キの活用形態を、両者を分別し別途扱うようになった現行国文法が、形態上の根拠もなく認め継承する必要はなく、従って助動詞キの活用形態におけるカ行系とサ行系の混在は解消させて別種のものとして扱うことも可能ではないかと思われる。つまり、同じ助動詞の活用形として活用表に記し置く必要はないのではないかと思われるのである。そして、宣長所説とは異なる立場、すなわち、助動詞キの活用にカ行系サ行系形態を一括した把握をしない立場が、既に宣長と同時代に存在してもいたのであった。

三

助動詞キの活用把握に関して、宣長と異なる立場をとるのは、富士谷成章（元文三（一七三八）―安永八（一七七九））の著書『あゆひ抄』[注5]の所説である。次に『あゆひ抄』のキとシの項を見ておきたい。まず、『あゆひ抄』巻四「〔六〕《来倫（くとも）》」を引き、私訳を施す（補足を丸括弧内に付す）。

〈何き〉〈何は、事・孔・在の往、また脚結なり。〉過ぎたることを確かに定めて言ふ言葉なり。ただし、全く人に向かひて言ふ言葉にて、たまたまひとりごとに言ふとも、自（みづ）から問ひ自（みづ）から答ふるほどの心にのみ詠（よ）むべし。里「タ事ゾ」「タ事デアッタ」「タコトデゴザアル」など言ふ。

いにしへにありきあらずは知らねども千年（とせ）のためし君にはじめむ（古、賀、三五三）

思はずにいるとは見えきあづさ弓かへらばかへれひとのためかは（後拾、雑三、一〇四〇）

〔き　と〕（タコトデゴザルト）〔きてふ〕（タコトゾト云）〔きや〕（タ事デ有タカヤ）〔きな〕（タ事デ有タナア）また〔に　き〕（テシモタコトゾ）〔ざ　り　き〕（ナンダコトデゴザアル）〔て　き〕（テ置タ事デゴザル）〔か　り　き〕（カッタコトデアッタ）など本抄を見よ。

〈私訳〉「何き」〈何（キの上接語）は、動詞・ラ変動詞・形容動詞の連用形、また助動詞である。〉過ぎたことを確かに定めて言う言葉である。ただし、全く人に向かって言う言葉であって、たまたま独り言で言うとしても、自ら問い自ら答えるくらいの意味でのみ（歌に）詠むべきである。口語「た事ぞ」「た事であった」「たことでござある」などと言う。（以下用例省略）

助動詞キが、どのような語、どのような活用形に下接するのか、端的に指摘した上で、これが「過ぎたること」、つまり過去の意味を示すものだと説かれている。また「確かに定めて言ふ言葉」とは、助動詞キが他者に向かって発される文脈の中で用いられるという指摘であり、以下その口語訳、歌例、応用例が挙げられてゆく。

明らかなように、成章は助動詞キの文法的意義を過去であると認めていると考えられるが、宣長のようにサ行系形態のシと同一視してはいない。このことは、助動詞キの分類項目名称である「《来倫（くとも）》」の命名にも窺われるように思われ、すなわち成章は、助動詞キを「来（く）」との有縁性において把握しており、それゆえ、形態上「来

（く）」との有縁性が感得されないサ行系形態は、ここに属すはずもなかったのであろうと察せられるのである。続いて『あゆひ抄』巻五「〔二〕《し身》」を引き、私訳を施す（補足を丸括弧内に付す）。

〈何し〉〈何は、脚結、事の往、孔・在の末などなり。〉〔きしかたのし〕といふ。《し家》の〔し〕を〔然し〕といふ。まがはすべからず。今よりいにしへの事をいひ、今日より昨日の事を言ふたぐひなり。里「タ」と言ふ。ただし、里には「タ」と言ふこと、常にみだりに言ひて〔し〕といふべき所ならずして、〔ぬ〕〔つ〕〔き〕などの脚結にわたりても言へど、これならでよく当たるべき言葉もおぼえねば、しばらくかく当てたり。見む人、きしかたの心を忘れず、心に浮かべて心得べし。近くいはば言葉の上に「サキダツテ」など言ふ言葉を添へてみればまがはず。

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つけふの風や解くらむ（古、春上、二）

たれこめて春のゆくへも知らぬ間に待ちし桜もうつろひにけり（古、春下、八〇）

〔ざりし〕〔からざりし〕〔にし〕〔たりし〕〔てし〕など本抄を見よ。

〔し〕文字、よみづめには必らず《疑属》または〔ぞ〕に打ち合ふべし。打ち合はずしてつめたる歌は、上つ代にのみ見ゆ。『後拾遺』に「世々経ともわれ忘れめや桜花こけのたもとに散りてかかりし」、これも靡づめの心にて上つ代のさまにはあらず。〔も〕に打ち合へるなどは、本抄疑例なり。

〈私訳〉「何し」〈何（シの上接語）は、助動詞、動詞の連用形、ラ変動詞・形容動詞の終止形である。〉〔「きしかた」の**し**〕と言う。《し家》の「し」のことを「然**し**」と言う（強意の副助詞シのこと）。紛らせてはいけない。今よ

り昔のことを言い、今日より昨日のことを言う類である。口語「た」と言う。ただし、口語で「た」と言うことは、いつもやたらに言っていて、「し」と言うべきところでなくて、「ぬ」「つ」「き」などの助動詞に亙っても言うのだが、これでなくてよく該当するべき言葉も思われないので、しばらくこのように（口語訳を）当てておく。見る人は、「きしかた」の意味を忘れずに、思い浮かべて理解すべきである。身近に言うならば言葉の上に「先だって」などの言葉を添えてみると紛らさない。（以下用例省略）

「し」文字（助動詞シ）は、歌末（文末）では必ず《疑属（うたがひのたぐひ）》（係助詞カ・ヤ）または「ぞ」（係助詞）に呼応するものである。呼応せずに（末を）結んだ歌は、上代にのみ見られる。『後拾遺和歌集』に「世々経ともわれ忘れめや桜花こけのたもとに散りてかかりし」、これも「靡づめ」（連体形終止）の意味であって上代の様ではない。「も」に呼応しているなどというのは、本抄（『あゆひ抄』の証歌集）疑う例である。

先掲の助動詞キと同じく懇切的確に、助動詞シについて〔「きしかた」のし〕であることが説かれる（引用箇所の後に、シと同属の助動詞として、セとシカとが立項されている）。この「きしかた」という言葉について、『あゆひ抄』は独自の用語として、今日言う「連用形」を示す名称に用いるのであるが、この部分に関しては一般的な表現として、すなわち「過去」の意味で用いていると考えられる。これは、口語訳の際に「先だって」という言葉を補うよう提案することからも明らかだろう。

『あゆひ抄』は、助動詞シにも、助動詞キと同じく、過去の意味を認めているのだった。しかし、両者を同じ助動詞として捉えることをせず、異なる語として異なる項目に分類しているのだった。その異なりへの注視は、口語訳の際の配慮にも窺える。近世当時、「し」のみならず「ぬ」「つ」「き」に相当する意味は、広く「た」が担っており、

別語としての異なる訳を宛がいにくくなっており（これは現代も同様）、成章は「きしかたの心を忘れず」と言わずにはいられなかったのである。と、このように配慮する中にも、シとキとが別して扱われていることは注目に価するだろう。また、後半部、係り結びにおける「「し」文字」を説く成章は、宣長と同様に係り結び現象に十分な理解を有しているけれども、その延長上に、形容詞語尾と助動詞キを関連付け、或いはカ行系サ行系混在の助動詞キ活用形態を構想するということはない。あくまでも形態上の一貫性を尊重し、語の分類・定位が行われたことが察せられるのである。この『あゆひ抄』の記述をめぐっては、「（キについて）し・しかトハマダ関連ヅケテイナイ。」という指摘[注6]もあり、宣長における理解、延いては今日通行の理解に、成章がいまだ達し得ていないように見る立場もあるけれども、果たしてそう容易く断言できることか。見てきたように検討の余地は残されており、形態上の定位という観点からは、むしろ成章の洞察に尊重すべき点が多いように思われるのである。

『あゆひ抄』では、助動詞キと同属の助動詞としてケリを立項している。そして、キとケリとの文法的意義における差異を指摘している。『あゆひ抄』巻四「〔六〕《来倫（くとも）》」を引き、私訳を施す（補足を丸括弧内に付す）。

〔何けり〕〈何、上に同じ。〉〔けり〕は『万葉』に「来」と書きたれど、まことは「来有」の心なり。すなはち〔き〕の立居なれど、〔き〕とのみ詠（よ）めるにくらぶれば、例のなり文字添ひて心ゆるべり。〔き〕は人に近くあひむかへるやうに言へり。〔けり〕は同じく言ひ定めたる言葉ながら理にかかはれるかたが（ママ）重くて、みづから言へる言葉となれり。里「物ヂヤ」「事ヂヤ」と言ふ。また、その所々によりて「タコトヂヤ」「タモノヂヤ」と「タ」文字を添へても心得べし。

常磐なる松の緑も春来れば今ひとしほの色まさりけり（ルモノヂヤ）（古、春上、二四）

花の木も今は掘り植ゑじ春立てば移ろふ色に人ならひけり（フモノヂヤ）（古、春下、九二）

〔にけり（テシモタコトヂヤ）〕〔てけり（テノケタコトヂヤ）〕〔なりけり（デアルコトヂヤ）〕〔ざりけり（ナンダコトヂヤ）〕〔かりけり（カツタコトヂヤ）〕〔けりな（コトヂヤナア）〕〔けりやは（コトヂヤカヤ）〕〔ずけり（ナンダコトヂヤ）〕など本抄を見よ。

〈私訳〉「**何けり**」〈**何**は、上（キの項）に同じである。〉ケリは『万葉集』に「来」と書いているが、実は「来有」の意味である。すなわちキの活用（変化派生）であるが、キとのみ（歌に）詠んでいるのに比べると、例の「なり文字（存在詞アリによる派生）」が添加して意味がゆるんでいる。キは人に近く互いに向かっているように言っている。ケリは同じように言い定めた言葉であるが理にかかわっている向きが重くて、自ら言っている言葉となっている。口語「物ぢゃ」「事ぢゃ」と言う。また、その所々によって「たことぢゃ」「たものぢゃ」と「た」文字を添加しても理解すべきである。（以下用例省略）

助動詞ケリが「来有（キアリ）」に由来することが明瞭に説かれ、キとの意義差は存在詞アリに負うところが多いことを指摘する。ケリの淵源に「来有（キアリ）」を想定することは、万葉集の用例に照らして今日概ね定説となっていること周知の通りである。また、口語訳として文脈により「た」を添加して理解し得ると述べ、ここからケリが過去の意義を示し得るとの理解があることを知る。

注目すべき点は、キとケリとの意義・用法上の差異に関する言及であろう。先掲の如く、キは他者に向かって対面するように（人に近くあひむかへるやうに）発されるもので、ケリは、「理」にかかわる趣が強く自ら言う言葉になっていると説く。実のところ、この箇所は難解で、成章の真意がしかとは承知しにくいのだけれども、存在詞アリの含有により、キよりも意味がゆるんでいる（心ゆるべり）という指摘と、さてこのように言われるからには、

キはケリ（来有）から存在詞アリ（有）を除いたところの、キ（来）であると捉えられていることになるという、その理解のしかたと、重要な言及があると考えられるのである。しかし今日、助動詞キとケリとの対照的研究において、『あゆひ抄』所説が直ちに参照されるわけでないことも明瞭である。助動詞キとケリとを比較するという、その検討において、助動詞キはカ行系サ行系の混在した今日通行の枠組みによって、ケリとの差異が追究されてしまうからである。これは『あゆひ抄』において、到底容認し得ない方法であろう。おそらく『あゆひ抄』において、比較検討は、キとケリとで行われるべきではなく、シ（およびセ・シカ）とキ（およびケリ）において行われるべきことなのであった。

思えば国語研究は、古来営々と積み重ねられてきた。先学は多くの事実を明らかにし、すぐれた成果は定説となってきた。ただし、定説と見なされる論考にも検討の余地はなお見出される。本稿は、助動詞キの活用形態というほんの小さな枠組みに、体制内に限った検討の余地を疑ってみた。この観点から、どのような議論が可能になるか、具体的考察は他稿を期さねばならないが、ここにもし通説とは異なる可能性が導かれるとしたら、素朴な疑問も存外すみに置けないのではないかと思われるのである。

注

1　以下「活用」に関しては簡要な解説を記す次の書に負うところが多大である。
小田勝『古代日本語文法』おうふう、二〇〇七年一〇月二〇日初版発行

2　「形状言」に関して次の書を参照する。
川端善明「用言」『岩波講座日本語6文法Ⅰ』岩波書店、一九七六年一二月八日第一刷発行

「情態言」に関して次の書を参照する。
阪倉篤義『語構成の研究』角川書店、昭和四十一年三月三十一日初版発行

3　本居宣長『てにをは紐鏡』（『本居宣長全集』第五巻、筑摩書房、昭和四十五年九月三〇日発行）

4　本居宣長『詞の玉緒』（『本居宣長全集』第五巻、筑摩書房、昭和四十五年九月三〇日発行）

5　富士谷成章『あゆひ抄』に関して本文・語釈は次の書による。句読点は私に改めた箇所がある。
中田祝夫・竹岡正夫『あゆひ抄新注』風間書房、昭和三十五年四月二十五日初版発行

6　次の書の中田祝夫「解説」二五頁による。
『あゆひ抄』（勉誠社文庫16）勉誠社、昭和五十二年四月十五日第一刷発行

参考文献

橋本（一九六九）、橋本進吉『助詞・助動詞の研究』（橋本進吉博士著作集第八冊（講義集三））岩波書店、一九六九年一一月二九日第一刷発行
日野（二〇〇八）、日野龍夫「宣長の落ちた陥穽」『京都大学国文学論叢』創刊号、平成十年十一月二十五日発行
山田（一九三六）、山田孝雄『日本文法学概論』宝文館出版、昭和十一年五月五日第一刷発行

（大谷大学准教授　国語学）

〈キーワード〉シ、本居宣長、富士谷成章